熊本シニアネットの活動の紹介―「ITを利用した高齢者福祉の観点から」

熊本シニアネット副代表 長谷川博

shiro@ac.mbn.or.jp

参考資料

2002年度　総括　http://hasegawa.web.infoseek.co.jp/2003soukatu3.pdf

2003年度　方針　http://hasegawa.web.infoseek.co.jp/tenbou03.pdf

2003年2月シニアネット日米井戸端会議in熊本

http://hasegawa.web.infoseek.co.jp/japame.pdf

はじめに

少子高齢化・高齢社会・核家族の時代、高齢者にとって「孤独」は重大な関心事になった。孤独は「生への気力を低下」させる。熊本シニアネットは、このような高齢者を「人と人を結びつける」活動を第一の目標にあげ、結びつける役目にIT（PC/インターネット）を利用することした。当初は、シニアをサポートするPCボランティア（パソコン＝PC）を募集し、1999年７月21名で発足した。マスコミ報道や2001～2年にかけての国のIT講習などの追い風が加わり（2003年10月現在）760名になった。最近では各地にサロン（支部）づくりや趣味・サークルづくりが旺盛に行われていてシニアがシニアへ教えるPC学習も盛況。活動の内容がメーリングで流れるとさらに参加者が増える。人と人が地域で結ばれた後は町作りの一翼を担う活動に発展する可能性を持っている。（活動概念図参照）

１　福祉資源としてのIT技術への注目

ITの間接利用（介護サービスなど）[1]

（１）従来ソシャルワーカや高齢者福祉サービスの従事者がITを利用し介護サービスを情報化し効率化したり、個人化（個人のプログラム）するなど支援プログラム作成・記録・評価などのIT活用の話題が中心だった。対象としては「福祉サービスの依存が高い要介護者中心」に支援側がどうITを利用するかが課題の中心だった。　　↓

（２）「当事者が直接ITを利用しQOLを向上させる」ことはずっとあとのこと。

ITの直接利用は障害をもつ人のコミュニケーション手段・SOHOなどによる社会参加が評価されたが一般健康高齢者にとって、ITは敷居（PCの価格、通信設定など）が高いものとステレオタイプ（ITは遠い存在、老人会活動）に受け取られていた。

・情報ネットワークを利用した交流は、1986年設立の米国のシニアネット（ラーニングセンターでPC普及）がモデルとなった。韓国では元老坊（Wollobang：

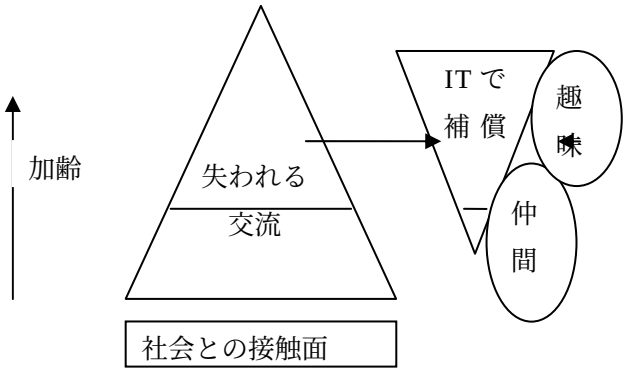
[1] 参考文献 David　Phillips,Yitzhak Berman 「Human Services in the Age of　New Technology」など

通信費の割引など国策に沿った高齢者向けサービス）などが勢力を広げた。日本では草の根ネットから発展。1999年33箇所程度だったものが3年後の2002年では100以上のシニアネット（名称はいろいろ）に急増。距離を越え、健常者・障害をもつ人の境を越えて語り合える場、アクションを起こす場として定着しつつある。各地のネットワークの立ち上がり方は様々で例えば、シニアネット仙台の場合　河北新報の特集記事「夕陽は沈まない」がきっかけである。

（３）熊本シニアネットは「孤独の解消・社会との接点を広げる・趣味の広がり、メールを介した人との交流を通して狭まった社会的な接触面を広げるきっかけをづくり」がテーマ。社会福祉学研究科で高齢者保健福祉専攻の一社会人大学院生が学生教員シニアネット久留米の熊本在住会員へ呼びかけて立ち上げた。

①シニアの孤立を無くし、新たな文化的、人的交流の空間を提供する。（人と人を結びつける活動。）②互いに教えたり教えられたりする気軽なシニアネットでともに成長することを目ざす。（趣味を含めて）③将来パソコン教室の自主運営も目指す。（習得した技術を地域で生かすことにつなげる）④医療・保健・福祉・法律・年金・植物栽培など広範囲の専門家の参加でネット相談室が開設を目指す。⑤福祉的観点によるシニアネットに関する研究も同時に行う。同時にシニアをサポートする PC ボランティア（パソコン＝PC）を募集し、「異世代交流・バリアフリーをめざす」などを掲げた。

社会との接触面を広げる＝QOL↑　（孤独の解消）



65 歳以上独居高齢者世帯：25 年で 2 倍に
2000 年（4678 万世帯中）
独居高齢者世帯 24%
↓
2025 年　　37%へ
（人口問題研究所推計）
03-10-17 熊日 34 面より

図１

高齢者がITを利用することは「耳が遠くなったら補聴器をかける」のと同様でごく自然なことだ。

２　熊本シニアネット概略[2]

１）交流の中心はメーリング

CMC（Computer-Mediated　Communication）　n:1　1:nと刻々と変化

① 参加者一人一人が大事な資源

② 情緒的サポートの存在

---

[2]　詳細は　2003 年熊本シニアネット活動報告集を参照のこと。

③ 所属・存在のサポート（関係の存在）
④ ゆっくり考えながら文書を交換する（時間が制限されるチャットは苦手）
⑤ 井戸端会議の機能→行事へ（ハイキングや趣味クラブの設立など）
⑥ 自己主張・独り言による発信機能（ポエム・芸術批評など）

２）メーリングの機能（アクションへの誘い）

①お知らせ
②アンケート機能
③学習（問題の把握　情報の共有）
④行動へ

シニアネットフォーラム２１in 広島で、本年９月７日（日）「シニアネットは地域社会の交流を活発にする」という題で、当ネット代表の福岡壽夫氏が事例報告を行ったがまさに一本のメーリングの働き、それと参加者が資源となり、地域の窓口になることでいろんな活動を派生している。

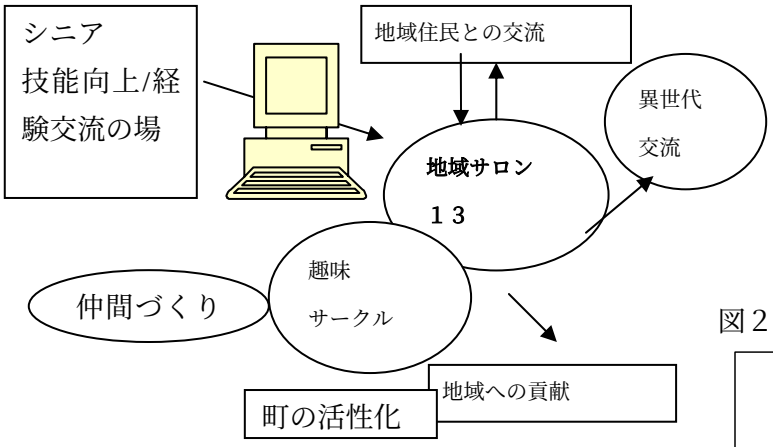


図２

シニアが持つ技能や経験は資源であり、学ぶことや囲碁やハイキング、マージャンなど直接的な交流の場を地域に作り、世代を越えた地域の人々との交流が、地域社会を豊かなものとしシニアネットの地域で果たす役割は非常に大きい。

熊本県内各地に「サロン（支部）」天草や水俣など遠隔地を含め13箇所設置。その地域、地域に密着した活動を展開している。「それぞれのサロンがパソコン教室・デジカメ教室の開催や、保育園児への竹とんぼや凧づくりの指導、老人ホームでのダンスクラブの開催（「車椅子ダンス」の指導）等を、地域社会の人々が参加しやすい形で幅広く行っており、サロンが置かれた地域の人々との交流を深めている。」[3]

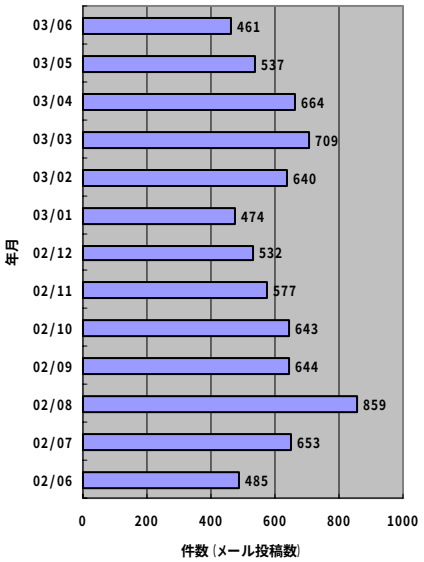
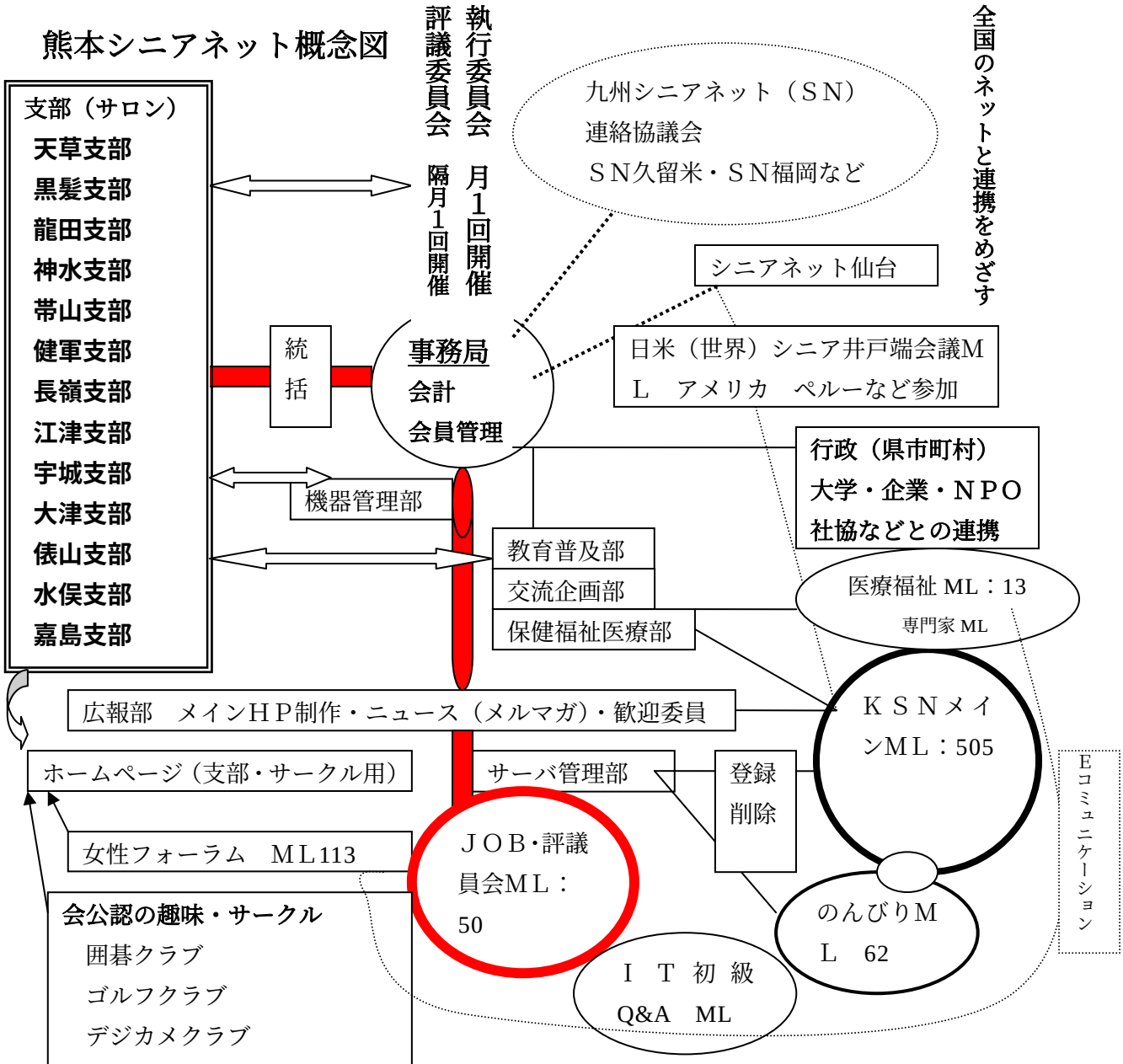


図３

[3] シニアネットフォーラム２１in 広島のホームページ呼びかけ文より引用。

熊本シニアネット概念図



会公認の趣味・サークル

- 囲碁クラブ
- ゴルフクラブ
- デジカメクラブ
- ハイキングクラブ
- 釣りクラブ
- ハムクラブ
- 龍田山散策会
- ＭＡＣクラブ　など

○ハイキングクラブは健軍サロンから発生し全体を巻き込む形で発展。　俳句は発展分離。

○他に会登録ではないマージャンやサロン中心の墨絵・ダンスサークルなど多数がある。

＊**ＭＬ**（メーリングリスト）：　ＭＬのあとの数字は参加者数

３６５日間　登録削除をサーバー管理者が行っている。

＊**評議委員会ＭＬ**（ＪＯＢ）は約 50 名の評議委員で構成された委員会のメーリング。ＫＳＮの運営情報や方針を日常的に専用ＭＬで交流する。各部長、副部長及び各支部（サロン）長、副支部長と事務局メンバーを登録。これまでの運営委員会に代わって評議委員会を隔月１回開催し、評議委員会からの提案に従い、その議決に従って執行委員会を毎月１回開催して実行方法を協議する。評議委員会と執行委員会はＫＳＮの舵取りの役割を果たす。

＜図４＞

３　活動の裏づけ　設立当初は会そのものの運営に力点を置いていたが運営委員会に、たくさんのメンバーが参加する中で地域からの情報や地域からの依頼が多くなってきた。

１）活動形態

「運営委員会を月１回（第四日曜日）開催」　最新１ヶ月間の行事報告（資料参照）

各部、各サロン、各趣味サークルからの報告がされる、責任者欠席の場合は運営委員メーリング（JOB―ML 参加者 40 名　）にて事前報告。（運営委員会を評議員へ 03 年改組）・委員は原則参加であるが、正会員は出席して意見を述べることができる。会議内容は速やかに事務局からメーリングに流され、透明で民主的運営が貫かれている。

２）顔の見える交流：交流会の企画（2 ヶ月に一回）新入会員自ら企画に参加。当初の交流担当者の 2,3 人の企画では参加者数に限度があった。100 人規模の企画は総会と新年会、花見会程度で、趣味やサロンを中心とした小規模の企画が増えている。

３）ネットの運営資金会費について：1999 年～2001 年 7 月まで会費無料だった（ほとんどボランティア）が、2001 年協力する「正会員」からは会費徴収を決定。無料参加の ML 会員との差異は「会の運営に参加できる」一点のみ；2002 年 3 月現在 170 名が正会員→2003 年 10 月 280 名へ（全体数 750）

会費だけで運営は困難であるが､地域の IT 講習や新聞記事連載などで収入を求めている。今後の収入の維持が課題

４）その他のサポート

ａ）PC サポート

・ＩＴお助け塾　本部にて毎週月水金行っていたが、03 年度から各サロンで実施中

・初級ＩＴ何でも相談室：ホームページやメールで相談できる。約半年で 375 通（相談回答が行き交っている）

・本部主催の学習会；ワードや exel、デジカメ、ホームページ、年賀状作りなど会員は無料で受講できる

・　今後各教室の講師の質を担保するために「シニア情報生活アドバイザー」（財団法人ニューメディア開発協会）の資格取得を目指す。取得者を講師として登録し、各地域で活躍してもらえるように努力していき、また同アドバイザーの県内唯一の認定機関をめざす。（形態としては高齢者が高齢者へ教えるシステム）

・アメリカのシニアネット　ラーニングセンターのように PC 受講が終了したら受講生がボランティアで講師のアシスタントをし、それから講師へという、講師の再生産を目標にする。

ｂ）保健福祉医療部のサポート

（医師 4 名をはじめ薬剤師・看護婦・保健婦・理学療法士・社会福祉士・精神保健福祉

士・介護支援専門員など 20 名の参加でメーリングを利用）：これまでの相談活動では確定診断がついていない事項の相談にはメールは不向きという結論に。（休止状態）

現在は一般会員中心に医師の会員を講師として学習会を行っている。（ＳＡＳなどの学習では、実際病院を受診された会員もいて、身に付く内容を定期的に企画している）

５　地域への支援活動・地域との関係交流への広がり。

ネットの発展

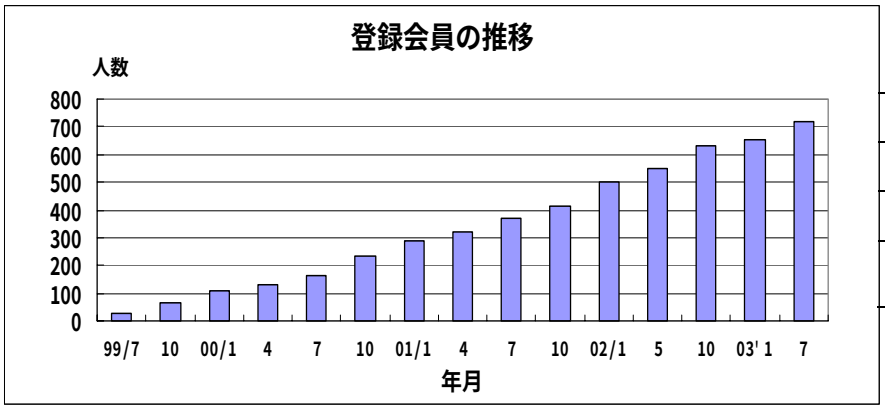


表１

年度	新入会員
1999	154 名
2000	207 名
2001	255 名
2002	133 名

99 年 21→03 年 760 へ

図５

地域との関わり

- 2001 年 9 月 14 日～11 月 14 日までの 32 日間、精神障害者復帰施設「あかねの里」にて障害者への IT 講習を支援。
- 携帯電話アンケート調査に参加
- 2001 年秋熊本大学高齢社会研究に熊本シニアネットも会として参加し、蘇陽のシンポジューム（住民主体の地域づくりフォーラム）に参加し、シニアネットの紹介を行った。2002 年は熊本県高齢者大会でも基調報告を行った。

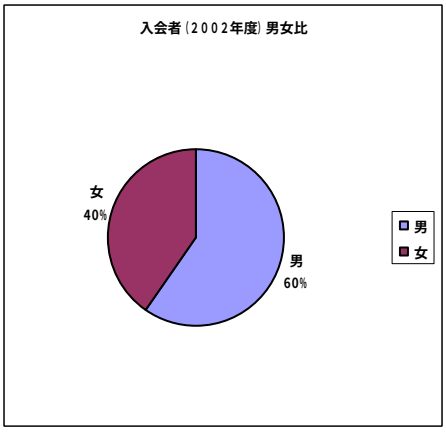


図５

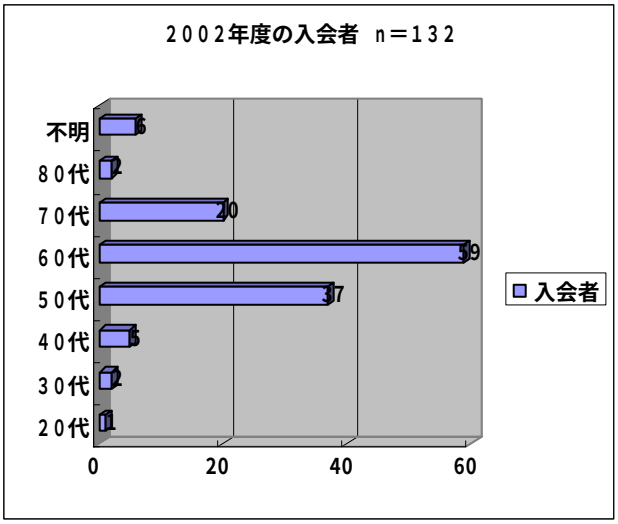
- 熊本大学の授業において「高齢者の新しい生き方」として熊本シニアネットの活動紹介を行った。（2003 年も実施）
- 県の情報化展へ参加　/　　嘉島町の IT 講習会を支援
- 市主催の健康展　講演会への誘いをメーリングなどに流して協力

以上のようにいろんな場面で他団体や行政との協力共同の場面が出てきた。多くの団体と連携しながら、シニアネットを普及する活動を展開している。（そこからの入会者も多い）

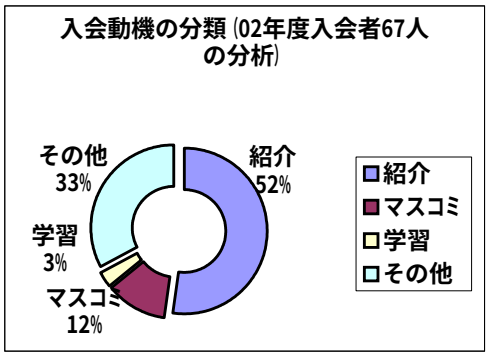
「入会者の特徴」（最近の動向）　男女比６；４　年齢 60 台最多、50 台、70 台と続く。PC 操作経験者は 2 年以上と 1 年以下の初心者と半々。入会動機は「知人からの紹介が

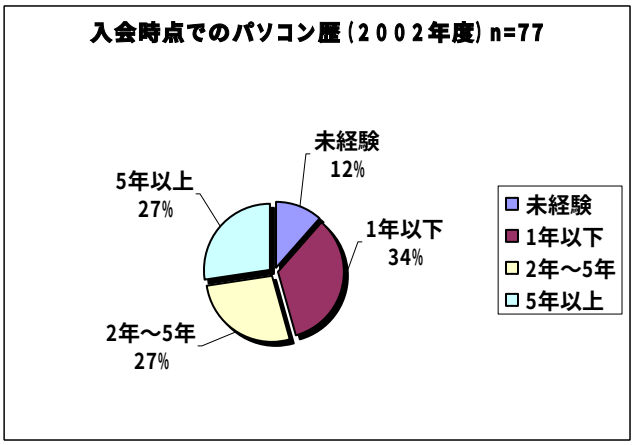
多い。マスコミ（新聞テレビラジオ）は案外少ない。

表２



入会動機	人数
親族	5
知人	17
友人	13
新聞	5
テレビ	2
ラジオ	1
学習の場	2
その他	22





おわりに

熊本シニアネットの今年の新たな方向は細かいパソコン操作やメール発信が困難な人に「yahoo メッセンジャー」や「MSN メッセンジャー」を利用して、顔と声の見える交流を普及し、「孤独」から開放する運動を方針のひとつに掲げた。IT を通じて他者との交流で生き甲斐」を再認識する場となれば当初の目的を満足させることができ、交流の輪をさらに大きく広げることができる。　　2003 年 2 月にはアメリカシニアネット・トーランス（日系人が多い）の代表を招き、トーランス・シニアネット仙台・熊本シニアネットの３者で「日米井戸端会議 in 熊本」を行い文化や IT 教育の違いを学びあった。今でも海を越えて日本語でメール交換を行っている。（日米井戸端会議メーリング）。日米のシニアの生き方の相違を居ながらにして交流できる時代だ。このような状況の中で、シニアネットの活動を通じて IT が一部の人のものでなく、必要とされる人のものとなるように広める努力をしていきたい。それが街づくりにつながれば幸いである。